KELES Newsletter

関西英語教育学会報 2025年度 第2号

事務局：〒582-0026 大阪府柏原市旭ケ丘4丁目698-1
大阪教育大学　多文化教育系 篠崎文哉研究室内
E-mail: kelesoffice@gmail.com 学会ウェブサイト: http://www.keles.jp/

2025年11月28日発行

巻頭言
学会でつながる世界

関西英語教育学会幹事長　篠崎　文哉（大阪教育大学）

この度、本学会の幹事長を務めることになりました篠崎文哉です。会員のみなさまはじめ、多くの方々に支えられながら学会の運営に努めます。どうぞよろしくお願いいたします。

今年度の活動としてすでに2つのセミナーを実施しました。多くの方にご参加いただき、講師の先生方との意見交流も行われました。次頁以降にありますように、私も非常に有意義な時間を過ごさせていただきました。

本学会では今後、12月に対面でのセミナー、2月に卒論・修論研究発表セミナー、新年度になり6月には年次研究大会の開催を予定しています。各セミナーや研究大会には、研究者や各校種の教員の方、企業の方など、様々な立場の方々にご参加いただいています。さらに、学部生や大学院生の姿も多く見られ、活発に交流する様子がうかがえます。

学会は、研究成果や実践報告などの発表を通じて知見を深められる場ですが、他の研究者や実践者の方との交流の場でもあります。いわゆるベテランの方々だけでなく、若手もともに成長し合える素晴らしい場所だと思っています。

12月のセミナーでは、「確かな学力伸長のための中高接続」をテーマに2つの講演を予定しています。対面での開催となりますので、講演中の議論はもちろん、セミナー開始前や休憩時間、終了後にも時間が許す限り、近況を報告しあったり、新しく出会った方と名刺交換をしたりと、直接の交流を楽しんでいただけるのではないかと期待しています。本セミナーの申込フォームは、すでに学会ウェブサイト上で公開していますので、ぜひお申し込みください。

また、2月の卒修論セミナーも盛り上げていきたいと思っています。個人的な本学会の思い出を振り返ると、私自身もかつてこの卒修論セミナーで発表させていただいたことがあります。関西の様々な大学から学部生や大学院生が会場に集まり、各部屋において研究発表を行いました。多くの学生（特に学部生）にとっては、学外の先生方や学生などの前で研究発表をする機会は限られており、初めての挑戦となる場合も少なくありません。その意味でも、本セミナーは発表経験を積む上で格好の場であり、同じ志をもつ仲間と切磋琢磨できる貴重な機会だと感じています。

私はというと、当時は大学院生として論文や専門書を読みながら研究を進めていましたが、セミナーにはそうした論文等の著者の先生方が実際に参加されていました。論文では遠い存在のような先生方から発表のコメントを直接いただけるのが本セミナーだと感じました。発表すること自体がかけがえのない経験になりますが、それに加えて「学会でつながる」ことの意義を学生のみなさんにも感じてもらいたいと思い、今回は対面での実施を検討しました（もちろんオンラインの良いところもあるのですが）。12月中旬頃に発表の募集を開始する予定ですので、ぜひご指導されている学生がいらっしゃいましたらお声がけいただくとともに、多くの先生方のご参加をお待ちしています。

こうした活動を通して、学会が世代や立場を超えて交流し合える場として、さらに発展していくことを願っています。本学会を「つながりの場」として活用していただくことで、英語教育の可能性は一層広がると信じています。

報告　関西英語教育学会 第 63 回 KELES セミナー

開催日：2025 年 10 月 5 日（日）　オンライン開催

10 月 5（日）に、第 63 回 KELES セミナー「理論と実践の往還から、教育研究の意義と具体的実践を探る」が開催されました。講師として、佐藤臨太郎先生（奈良教育大学）と泉谷忠至先生（近畿大学附属高等学校・中学校）にご講演いただき、教育研究の意義を考えることができた機会でした。お申込み・ご参加いただいた 70 名の皆様に心から感謝申し上げます。

第 63 回 KELES セミナー

セッション１：

英語による授業（English-Medium Teaching）

セッション 1 では、佐藤先生が研究者の立場から、泉谷先生が実践者の立場から「英語による授業」の在り方とその意義についてご講演された。

佐藤先生は現場での状況を踏まえた「理論と実践の往還」の重要性を強調され、Krashen のインプット仮説をもとに、理解可能で $i+1$ を意識した教師の発話が生徒の言語使用を促し、日本人英語教師が自国の言語・文化・習慣を活かし自信をもって英語を用いることが、生徒にとって「英語を用いるモデル」となり、ネイティブ信奉からの脱却につながると力説された。また、教師の英語使用が生徒の Willingness to Communicate（WTC）を高めた研究や、インプット不足でアウトプット中心の授業が WTC を下げた研究を紹介され、教師の英語使用が生徒の「〇〇先生のようになりたい」という思いを生むと述べられた。「英語による授業」を行う際の留意点としては、①正確性に留意するが、こだわり過ぎない、②理解のためのポーズ、③ジェスチャーや表情の活用、④板書の活用、⑤生徒のレベルに応じた調整、の５点が示され、必要に応じた日本語使用の柔軟さも重要とされた。「多少のためらいがあっても、教師が英語を自然に使えることは授業を進めるうえで重要である。英語による授業に段階的に取り組みながら、自らの英語力を磨き、教員間でも可能な範囲で英語を共通言語として活用していくのはどうだろうか」と提案された。

泉谷先生からは、高校 2 年生を対象とした授業実践の映像紹介があり、「オクラは何色の網に入れると新鮮に見えるか」「寿司の皿の色はどんな心理的効果を与えるか」といった視覚教材を活かしたやり取りを通じて、生徒に既習表現を用いる機会を与え、新しい課のトピックへの興味づけを与える意図が説明された。英語で授業を行う理由として、「インプットの提供」「生徒の英語使用の場を作ること」「教師がモデルとなること」の３点が挙げられた。「英語で授業を行うことで、教師の高度な英語力が求められる一方で、教科書だけでは得られないインプットを与えられるからこそ、挑戦する価値がある」と強調された。

質疑応答では、「生徒の WTC の高まり」について、泉谷先生は「統計的データはないが話そうとする意欲の高まりを感じる」と述べられた。「学年ごとの調整方法」について、佐藤先生は「$i+1$ だけでなく $i-1$、$i-2$ といった調整や日本語・視覚情報の活用も必要となる」と述べられ、泉谷先生は「発話を強制せず、生徒の状況に応じてアレンジする必要性」を補足された。お二人の理論と実践の両面からのご提案を伺う中、自身が夢中で英語に集中し理解しようとする学習者となっていることに気づき、今後の授業改善への意欲を新たにした。

報告者：黒川　愛子（帝塚山大学）

セッション２：文法指導（Grammar Instruction）

まず佐藤先生より、理論面から文法指導の流れについて説明があった。伝統的な PPP（Presentation–Practice–Production）モデルは、文法項目を提示・練習・運用へと段階的に導く構成であり、教師主導による体系的な指導が可能という利点をもつ。一方で、生徒が自発的に意味を構築する機会が限られ、実際のコミュニケーションに直結しにくいという課題がある。そのような批判を背景に、タスク遂行を介した方法 Task-Based Language Teaching (TBLT) や Task-Supported Language Teaching (TSLT) を介した文法指導の在り方が再考されている。

しかし、佐藤先生は PPP を全面的に否定するのではなく、形式の明示的指導と意味中心活動を統合した Revised PPP を提案された。これは、文法指導

の体系性を保持しながら、ドリル練習後に自由度の高いコミュニカティブ・ゴールを設定することで、学習者の自律的な運用を促すものである。また、文法説明を単なる補足ではなく、言語理解を支える知的活動として正当に位置づけ、教師の言語使用(teacher talk) 自体を学習資源として活用する必要性を強調された。さらに実践場面では、文法導入の方法として、規則を先に提示する deductive approach（演繹的指導）と、使用例から規則を発見させる inductive approach（帰納的指導）を状況に応じて柔軟に用いることの重要性が指摘された。

その理論的枠組みを受けた実践報告では、泉谷先生より Revised PPP の授業展開事例が紹介された。Presentation 段階では、演繹的・帰納的に文法を説明し、生徒同士のやり取りを促す工夫が必要となる。その授業例として、助動詞を扱う際に電車内の場面を設定し、can, may, should を用いて乗車マナーを考えさせる活動を示された。そこには文法知識を日常的状況に結びつけ、互いの規範意識を確認し合う形式練習を超えたコミュニケーションと学習を促すことを意図が込められている。また、Practice 段階では、音読や文完成といった機械的練習に加え、トピックに基づく meaningful practice を取り入れ、形式と意味の統合的理解を促していた。さらに Production 段階では、文法項目を使った制限付きの練習から、より自由な表現活動へと発展させ、Small Talk やペアワークで既習表現を再利用する実践が提案された。これらの段階的活動を経て、生徒が文法知識を表現活動に活用し、理解から運用へと自然に移行する過程が示されていた。

ディスカッションでは、教師の英語使用は、学習者が理解し、学び、運用する資源として不可欠との視点が改めて確認された。教師の説明に偏りがちな文法指導の是非を改めて問い直す機会となった。

報告者：福島　玲枝（畿央大学）

セッション３：研究と実践（Research and Practice）

佐藤先生は、SLA 研究に基づく「科学的に効果的な指導法」が頻繁に語られる現状に触れつつ、研究で得られた理論はあくまで暫定的な仮説であり、絶対的な指導法ではないと自身のスタンスを示したところからスタートした。

佐藤先生が長年研究されてきた Willingness to Communicate (WTC)を例に挙げ、研究成果からは、初級者の高い WTC は「安心感」「義務感」「自己効力感」に支えられ、上級者の場合は「自己表現の機会」などが WTC を高めることが分かったと紹介された。しかし、最近の研究では WTC の程度とパフォーマンスに関係がないことが明らかになり、WTC が高い・低いといった程度を考慮する必要があるのか疑問に感じるようになった。

佐藤先生は、ご自身が研究者であり実践者でもある立場から、「研究のための研究」と「教育のための研究」の狭間で感じてきた葛藤について語られた。そして、「実践は研究よりも先行しているのではないか」「研究は実践の後を追うものではないか」と、ご自身の経験を交えて問いかけられたことが、特に印象的で考えさせられた。

理論と実践の往還について紹介され、佐藤先生自身も研究を通して、沈黙が必ずしも WTC の低さを示すものではないという認識の再構成に至った経緯を紹介され、改めて研究のための研究に対して問題提起を投げかけた。

泉谷先生は「なぜ研究を続けるのか」と問いかけ、実践者としての自身の英語力向上のためだけでなく、自身の授業をより深く分析する手段として研究を位置づけた。授業は日々行われているが、その効果は十分に検証されていないことが多く、研究を通じて授業の質を高める可能性があると述べた。

過去の研究（Koga & Sato, 2013; Sato & Koga, 2012）では、英語による授業が生徒の「話す意欲（WTC）」を高めるとされているが、発表者自身の実践では有意な変化は見られなかったという。生徒のコメントからは、友人とのグループ活動では安心感があり、間違いを恐れずに話せるという声があり、否定的な評価への不安や受験が話す意欲に影響している可能性が示唆され、研究が授業を見直す機会になることを示された。

しかし、研究には時間や費用がかかること、研究方法や統計の習得が必要であることにも触れ、「研究は授業改善にどれほど貢献するのか？」という根本的な問いが投げかけられた。研究が自己満足に終わるのではなく、日々の授業改善にどうつながるかを見極める必要があると強調された。

最後に、「教師は研究よりも授業改善に時間を割くべきか？」という問いが提示され、参加者に思考を促す形で発表は締めくくられた。

報告者：宮崎　貴弘（神戸市立葺合高等学校）

関西英語教育学会　セミナーのご案内

第 64 回 KELES セミナーを 11 月 3 日（月・祝）にオンラインにて開催致しました。多くの皆様にご参加いただきありがとうございました。報告はまた後日致します。今後、下記のセミナーの開催を予定しております。皆様のご参加を心よりお待ち申し上げております。

第 65 回 KELES セミナーのお知らせ

日時：2025 年 12 月 20 日（土）13:00～16:50

会場：関西大学　梅田キャンパス
https://kandai-merise.jp/access/

参加費：会員　無料、非会員　1,000 円

参加方法：事前参加申し込みフォームはこちら
※当日参加も可能ですが、会員・非会員にかかわらず、できるだけ 2 日前（12 月 18 日）までに参加申し込みをお願いします。
※非会員の方は、事前に参加申し込みをした上で、当日受付で参加費をお支払いください。

テーマ：「確かな学力伸長のための中高接続」

講師：増見 敦先生（神戸大学附属中等教育学校）
臼倉 美里先生（東京学芸大学）

スケジュール：
13:00-13:10　開会の挨拶
13:10-14:40　増見 敦先生ご講演
「『生徒自身の英語』を育てる授業デザイン
–パフォーマンス課題を核に、探究的学びと小・中・高接続を背景にして」
14:40-14:50　休憩
14:50-16:20　臼倉 美里先生ご講演
「中高 6 年間を見据えた学校英語教育への提言」
16:20-16:40　QA セッション
16:40-16:50　閉会の挨拶
ご講演内容の詳細は、KELES ウェブサイトにてお知らせいたします。

第 29 回卒論・修論研究発表セミナーのお知らせ

日時：2026 年 2 月 8 日（日）9:00～15:00
会場：大阪教育大学天王寺キャンパス（予定）
発表申し込み〆切：1 月中旬頃

最新の情報は学会ウェブサイトからご確認ください
http://www.keles.jp

学会事務局からのお知らせ

◆各種お問い合わせ先

年会費、学会誌、セミナー、入退会などに関するお問い合わせは、学会ウェブサイトの「お問い合わせフォーム」をご利用ください。
https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfTFG1bUpHC84nkkd2zTyvniFfvUD1ve_AfA557qcNUHYLHdg/viewform

◆会費納入のお願い

本年度の会費の納入がまだの方は、急ぎお振込みをお願い致します。お振込先は、以下のウェブサイトでご確認いただけますよう、お願い致します。
http://www.keles.jp/join/